

「75歳からの祝福」

創世記 12 : 1 - 4

October.6.2024

創世記 12 : 1 - 4 (パワポ)

Preface

去年まで「高齢者顕彰礼拝」という名称で献げてきた礼拝を、今年から「グランドジェネレーションデー」と変えた経緯について、先ずお話しさせていただきます。

WHO（世界保健機関）では、65歳以上を高齢者と定めております。

65歳以上74歳以下の方を前期高齢者、75歳以上の方を後期高齢者としてしていますが、めぐみ教会の高齢者顕彰礼拝の高齢者という言葉は、75歳以上の方々を意味する言葉としてこれまで用いてきました。

また、顕彰という言葉、辞書でその意味を調べてみますと、「隠れた善行や功績などを広く知らせること。広く知らせて表彰すること」とあります。

つまり、高齢者顕彰礼拝は、「75歳以上の方々に敬意を表し、ともに生きられる恵みに感謝し、感謝の思いを、ほんの気持ち程度かも知れないけれども、小さな心ばかりのプレゼントをお渡ししながら皆で、神の愛のうちに年を重ねる祝福を喜ぶ礼拝」ということになるのかなあとと思います。

もちろんここには、喜楽希楽サービスの働きの紹介と喜楽希楽サービスへの応援や祈りを皆で共有することも含まれます。

なので当然のことながら、高齢者顕彰礼拝という名称でこれまで礼拝が献げられて来たことは、主の祝福であり恵みであると思います。

ただ、「高齢者顕彰」という名称について、「違和感を覚える」という声が聞こえるようになってきました。

「75歳にはなったものの、まだまだ元気だし、高齢者と言われることがあまりいい気持ちがしないんだよね… 顕彰されるっていうのも、何かしっくりこないし…」というようなお声をチラホラと耳にするようになりました。

そこで、5年程前から、礼拝企画委員会で、「高齢者顕彰礼拝」という名称に代わる新しい名称について毎年話し合ってきました。

「高齢者祝福礼拝」、「シニア祝福礼拝」、「シルバー世代祝福礼拝」、「喜楽希楽デー、または喜楽希楽サービスデー」等々、色々考えたのですが、遂に行き着いたのが、「グランドジェネレーションデー」という名称でした。

Part One

これまでの「高齢者顕彰礼拝」という名称は、そのすべてが漢字表記でしたが、「グランドジェネレーションデー」というのは真逆と言いましょか、表

現のすべてがカタカナなので、その変化に、ちょっとびっくりされるのではないだろうかという憂慮はありましたが、「マナデー」や「森学デー」というように「デー」が付く礼拝が毎年のように献げられていますし、「イースタータイド」や「アドベント」、「クリスマスグルーヴ」というように、これまでもカタカナ表記の礼拝が献げられてきましたので、それらと同じように受け入れて頂けるのではないだろうかと考えました。

そして何と言っても、その意味、「グランドジェネレーション」という言葉の意味が素晴らしく、これまでの高齢者顕彰礼拝という名称で献げられてきた礼拝の意図するところが、その言葉の中に十分に含まれているだろうと思えるばかりか、それ以上の意味合いまでも加味されているように思えました。

「グランドジェネレーション」という言葉は、一見しますと、英語のように思えますが、実は和製英語で、元々英語としてある言葉ではないんです。

誰が考えたのかと言いますと、小山薫堂という放送作家・脚本家の方が作った造語なんです。

熊本県のキャラクターくまモンを生み出した方でもあります。

「グランドジェネレーション」という言葉は、定年後の第二の人生を行動的積極的に楽しむ人々を指す造語として考え出された言葉なんです。

「グランド」という言葉は、「最上級」を意味する言葉で、人生の中でも最上の世代と捉えつつ、若々しく年齢を重ね、豊かな知識と経験を持ちながら、人生を様々なスタイルで楽しんでいる世代の年長者を敬意をもって表す言葉が、「グランドジェネレーション」という言葉なんです。

あえて、この「グランドジェネレーション」という言葉を日本語表記にして、「最上の世代祝福礼拝」という名称も考えたのですが、ちょっと重々し過ぎるので却下となりました。

私たちの身近ですと、お隣のイオンモールでは、このグランドジェネレーションというコンセプトに賛同して、10年程前から、敬老の日を「G.G.デー」、「グランドジェネレーション」の頭文字を取って「G.G.デー」と呼びながら、キャンペーンを展開し、商品を開発をしているそうなんです。

(決して「ジジーデー」ではありません。)

そして何よりも、なぜ、「グランドジェネレーションデーで行こう！」となったのかと言いますと、正に、所謂高齢とされる年齢で、最上級の世代として神さまに用いられた神の人たち、聖書の重要な登場人物が少なくないということに結び付いたというのが、最も大きな理由です。

Part Two

先程お読みしました創世記12章に登場するアブラハムも、正に75歳という年齢を起点にして、人生が大きく神の手によって変えられた人でありました。

「わたしはあなたを祝福し、あなたが祝福となり、この世界の、全世界の全

世代の人々があなたを通して祝福される。あなたは、神であるわたしの祝福の起点となる人物として、わたしが選び出した」と、天地万物をお造りになった主なる神様から約束を頂きました。

そして、その約束の言葉は、人類を永遠の滅び、燃えるゲヘナ地獄に落ちて永遠に苦しまなければならないという罪の報酬から贖い出し、救い出すためにこの地に来られた神の御姿なる救い主イエス様が、このアブラハムの子孫としてお生まれになったことで、究極的な成就に至りました。

神さまの為さることは、1年2年という短いスパンだけでなく、聖書を見ますと、100年単位だったり1000年単位だったりするような、人生100年にも満たないことの多い私たちにとっては中々想像しにくい時間のかけ方をしておられます。

ですので、話のスケールが大きすぎて、ちょっとピンと来ないところもあるかもしれませんが、一先ず当の本人、アブラハムにしてみれば、「何で今なんでしょう？ 何で私なんでしょう？ もし私だったとしても、もう少し若い頃の方が力もあれば、将来性だってあったでしょうし、何でわざわざ、年老いた今の私なんでしょう？」という迷いや疑問があっただろうことは、他の聖書箇所からも想像することが出来ます。

さらには、創世記12：7を見ますと、

創世記12：7（パワポ）

主はアブラムに現れて言われた。「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える。」

と、75歳にして一人も子どものいないアブラハムにとって訳の分からない言葉を、神さまはアブラハムに下さいます。

ただでさえ、年老いた自分を選び出しお立てになったと戸惑っているのに、拍車をかけて訳が分からなくなったのではないだろうかと思うんです。

ですがこの後、神さまの意図しておられることの訳が分からないアブラハムに、もっと具体的な訳の分からないことを、神さま告げてくださいました。

何をお告げなさったかと言いますと、「わたしは、年老いたあなたと同じように年老いたあなたの妻サラとの間に、男の子を与える」という言葉です。

神さまは、100歳になってまだ子どものいなかったアブラハムに、「男の子を与える」という最も具体的な内容を話してくださいましたが、アブラハムにしてみれば逆に具体的過ぎて、もっと訳が分からなくなってしまい、90歳の妻サラと共に、「そんな馬鹿なことが有り得ますか？」と、馬鹿にするような笑みを浮かべるような反応をしてしまいました。

限りある私たち人間からすれば、まあ当然と言えば、当然の反応だったと思います。

でも、神さまからすれば、人間の力が一切及ぶことのない、可能性が全くないその時こそが、そのアブラハムの年齢こそが、最適な時だったということです。

使徒パウロの告白が思い出されます。

「私は、キリストのゆえに、弱い時にこそ、強いのです。もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります。私たちはキリストにあって弱い者ですが、神の力によってキリストとともに生きるのです」という、「何の力も及ばないその時こそが神の時である」というパウロの告白が思い出されます。

肉体的にも、精神的にも、あるいは霊的にも弱っている時こそ、主の時ですね。

ある意味、年を取る重ねるといえるのは、主の時が表れるチャンスが、否応なしに開かれる時だとも言い換えることができるのかもしれませんが。

ある時、「辛いなあ。僕には出来ないなあ。無理だなあ。能力も才能もなさすぎる」という思いに打ちのめされて、脱力感でベッドから起き上がれなくなってしまった時、妻から、「じゃあ、祈ればいいよ。『出来ません』って祈ればいいよ。そこから始まるんじゃない」と言われました。

「そんなの分かってるよ。分かってても、出来ないから辛いんだよ」と心の中で思いながらも、じわっと、「そうだなあ」という思いが、光一つない暗闇の中に、小さな光が差し込み始めるように湧き上がってきました。

何だかんだ言って、「僕がやるから助けてください」という心持ちで、毎日を日々を生きている。

結局、自分の力に頼ろうと、自分の思い、自分の考え、自分の正しさ、自分の優れた点、自分の誇りや自慢、自分の能力をより際立たせようとして挫折し、くじけ、失望し、ダメだと決めつけている。

神様の力が表れる隙間さえも譲ろうとしない。

いや、そんな隙間を埋めるために神を利用し、神に求め、神の御旨を成すことが人生の目的ではなく、自分事の達成や成就の度合いに従って、聞かれた聞かれなかった、与えられた与えられなかった、開かれた開かれなかった、守られた守られなかったと宣いながら、信仰もどきを生きようとしていたということに日々気付かされ続けております。

そういう意味で、年を取る年を重ねるといえるのは、物理的肉体的衰えを通し、誰もが否応なしに、自分の弱さと向き合わなければならない状況を作り出されて行くことであると、そしてそれに伴って、主なる神様の力、誉れ、勢い、知恵、栄光を経験させられる機会が広がることなのではないだろうかと思うのです。

肉体的な衰えを感じれば、以前よりも「死」を近く感じるでしょうし、死を

感じれば、その先にいのちのことを考えたり期待せずにはいられないでしょうし、自分の意志に反して死に向かっている自らの無力さを認めざるを得なくなるでしょうし、自分のいのちだと思ってきたいのちが、自分の思い通りにならないという現実の前に、「いのちを司られているお方がいるのではないだろうか、いるはずだ、いやいや居てもらわなくては困る、この人生報われたい。居るならば、その方により頼みたい」と否応なしに思えてしまうような、神との出会いのチャンスへと導かれて行くのが、年を重ねる、年を取ることなんだろうと思わされます。

Part Three

モーセもそうでした。

イスラエルの民を導き上るリーダーとして神に呼ばれ召し出された80歳という年齢は、詩篇90篇でモーセ自身が、「私たちの齢は70年、健やかであっても80年。そのほとんどは労苦とわざわいです」と詠っていますように、モーセにとっては、「今死んでも、明日死んでも何らおかしいことはない」という死を意識しながら、毎日を生きるような年齢でした。

実際にモーセは、神様から、「わたしは、80歳のあなたを用いて、200万人以上のイエスラエル民族をエジプトの奴隷という身分から導き出す」と言われた時、アブラハムと同じように、「そんな非現実的な馬鹿なことは仰らないで下さい。今の私には何もないどころか、いつ死んでもおかしくないような日々を生きている一老人ですよ」というような反応を示しました。

ところが、それから40年間120歳まで、しかも120歳でモーセが亡くなる時の状態は、

申命記34：7 (パワポ)

という状態でした。

つまり、どんなに自分で自分の死を覚悟し意識したところで、自分のいのちを終えることなんか出来ない、逆に、目もかすまず、気力も衰えていないほどにどんなにピンピンしていても、「そこまで！」と神さまが仰ったらそのいのちはそこまでという、いのちのすべて、またその可能性のすべては神の御手の中にあるということですね。

「いのちは、神の御業をそのいのちを通してなされている時、すぐ燃え尽きてしまうはずの芝が燃え尽きないように燃え続け、神の御旨を成させて頂くということゆえに幸いであり、条件に左右されない喜びを喜び、与えられたそのいのちは最善のいのちなんだということを実感出来るものなんだ」と、モーセはその生き様を通して学び、示し、教え、そのいのちの実体験を書き残しながら、21世紀に生きる私たちにも教えて下さっています。

肉体的にも、精神的にも、靈的にも弱ることは、神の御手にあつては決して悪いことではなく、むしろ、神の時であり、神が待ち望んでいる時でもあり、チャンスの時でもあるんだということを教えられるように思います。

グランドジェネレーションデー。

10、20、30、40、50、60、70、80、90、100歳、110歳、120歳、何歳をもって、グランドジェネレーション（最上の世代）とするのかは、人によって違うのかもしれませんが、聖書が私たちに教えて下さいます一つの事実は、神に生きるなら、主イエス様に従って生きるなら、イエス様の教えと御言葉に聞き、守り、行うことが生きるということであり、主イエス様とともに、主イエス様と心を通わせ、主イエスがその内にいて下さる人生は、いつでも最上の世代だということです。

どうすることも出来ない困難や苛立ち、身から出た錆なのか、自分ではどうすることも出来ない定めのような導きなのか、衰えなのかそれ相応なのか、耐えるべき苦難なのか突破を試みる壁なのか、無力なのか非力なのか、受け入れるべきなのか抗うべきなのか、何とも表現し難い人生の道のりを歩む中で、私たちが聖書から教えられる一つの事実は、それすべて、すべてが、イエス・キリストの内にあるならば、最上の世代、グランドジェネレーションだという約束です。

アブラハムも、モーセも、それぞれに75歳、80歳という所謂高齢の時、神に出会いました。

それからの人生は、それ以前の人生よりも大きな苦難だったり、経験したことのないような挫折だったり、無力さだったり、非力さだったりと通らされましたが、その後の人生すべてがグランドジェネレーションでした。

Conclusion

病に倒れて、以前のような生活がお出来になれなくなった方を訪問したことがあるのですが、「どんな顔して、どんな表情でお会いすればいいのだろうか」と悩みながらその方にお会いしに生きますと、逆に、「何でそんな心配そうな表情をされているのですか？」ということ語り掛けられているような明るい表情で出迎えてくださいました。

そして、こう仰るんです。

「以前のように行きたい時にいつでも教会に行けなくなってしまいましたし、体だって以前のように自由に動かすことが出来なくなってしまいました。本当に私は今、幸せです。

これまで聞いて来た主日礼拝のメッセージを頭の中で思い返しては再び味わい、これまで蓄えてきた聖書の言葉を暗唱し、イエス様に語り掛けるんです。こんなに24時間ず〜っと、イエス様との語り合いの中にいることなんか出来

ませんでしたので、今が幸せです。」

人にとっての最上の世代・グランドジェネレーションは、その人がイエス様とともに、イエス様の言葉に、イエス様のうちに、そして、イエス様がその人のうちにいて下さるということに掛かっています。

75歳以上でも、75歳以下でも、すべて、主イエス様のうちにあるならば、グランドジェネレーションです。

主イエス様にあって、私たちともに、グランドジェネレーションを生かされている祝福を噛み締めながら、また新たなその一歩を踏み出していけたらなあと思います。

お祈りいたします。

祝祷：創世記12：2